

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本地理教育学会

（代表者 犬井 正 会員数 約560名）

TEL 042-329-7729

地 理 A

1 前 文

今年度の「地理A」の出題は、昨年同様5題の大問で構成された。内容及び難易度は基礎的あるいは標準的な問題が多く、全体としては適切であったと言える。また昨年、高等学校学習指導要領の趣旨にのっとり、知識・理解に偏ることなく思考・判断、資料活用の観点を重視してほしいという要望については、地図やグラフ・図・写真を多用して、地理的な考察力や判断力を問う問題が多くなっており、高く評価できる。また第1問に見られる「地理の基礎的事項」についても、「地理B」的な出題が昨年よりも減り、「地理A」でも「地理B」でも共通する内容の基礎的事項に関する出題が多く見られるようになった。この点についても評価できよう。

しかしながら、いくつか改善を望む点がある。一つ目は資料が出されていても最終的には資料を活用しなくても知識だけで解けてしまう問題が見られるなど、資料活用の観点が十分生かされていない設問についてである。昨年よりも改善されていると考えられるが、資料を多用する方向を評価しつつ、より一層の工夫をお願いしたい。二つ目は大問の出題構成比である。「地理A」の目標及び内容に従い作成される各学校の年間学習計画では、世界の諸地域の生活・文化と近隣諸国の生活・文化の配当時間が多くなっており、教科書の記述も約30～35%程度を占めている。それに比べ、これらの項目の出題構成比は実態よりも少ないと考えられる。小問数や配点だけではなく、大問に対する内容の割り振りも再検討してほしいところである。もし大問構成での割り振りが難しいようであれば、地理の基礎的事項の中に割り振るのも一案であろう。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 全体としては地理的な基礎的内容で適切な問題である。昨年よりも「地理B」的な内容について、あまり深入りせず、また「地理A」と「地理B」に共通する内容、例えば地図の利用や生活・文化に関するものが増えており、昨年と比べて改善されたことは大きく評価できる。作問に当たっては、「地理A」と「地理B」を比較し、基礎的事項とは何かを今後一層検討してほしい。なお正射図法の図中の各地点の位置が見づらいので、改善していただきたい。

問1 15度ごとの経度を参考にして、時差や日付変更線の理解について問う問題で、基本的な問題である。地図に15度ごとの経線が引かれており、適切な問題になっている。

問2 個々の山脈について正確な知識がなくても大地形の特徴を理解していれば解答は可能であり、適切と言える。

問3 自然環境と生活を絡めた問題であり「地理A」らしい問題であり、基本的な問題である。

- 問4 日本の東端・南端の位置を正確に覚えている生徒は少ないのではないかと、東西南北端の位置か、北回帰線を図示しないと解答は難しいと思われる。
- 問5 写真は鮮明で見やすく、どのような宗教の施設なのか明瞭に示されている。また「地理A」の生活・文化の範囲であり、本年は地図上の位置を問うており、より地理的な問題となって評価できる。
- 問6 問い方が面白い。単純に対蹠点を問うものよりは思考力が必要とされ、評価できる。難しい問題ではないが、平面を球面に転換してイメージすることが苦手であるので、受験者は苦戦したと考えられる。
- 問7 気候区分の大観的学习で理解できる問題であるが、図2の周辺部であるRとS地点の位置が分かりづらい。
- 問8 地図から読み取る形式になってはいるが、最終的には知識を問う設問になっている。出題形式に工夫が欲しい。
- 第2問 地域調査に関する出題で、地勢図と地形図の組合せ、統計資料の読み取りや地域調査の方法に関する出題など、バランスがとれている。しかし、一部統計資料の読み取りが複雑であり難易度が高い。
- 問1 地勢図での問題は新味である。出題されている地名が分かりやすく示されているとともに、必要な工夫がなされており、好感が持てる。ただし、問題のレベルとしては基礎的であるが、地勢図のためやや小さく、大根島の馬渡付近が陸繋島か、飯梨川河が三角州どうか分かりにくい。
- 問2 地図と景観写真とを対比して理解する能力は地理的技能として大事であり、こうした問題の継続的な出題が望まれる。適切な問題である。
- 問3 縮尺の異なる2枚の地図を対比する読図問題である。様々なスケールで物事を考えることは地理的な力として、特に重要であると考えられる。ただし、選択肢の半分は地勢図を使うことなく地形図のみの読解で判断できてしまうことは残念である。
- 問4 統計資料の読み取り問題であるが、二つのグラフを読み取り比較した上に、かなりの計算を要するので時間を要し、難易度はやや高い。ところで、大学入試センター試験の問題では計算力をどの程度まで要求するのであろうか。この小問よりもハイレベルになると地理の問題ではなくなる可能性がある。このことについては一度検討していただきたい。
- 問5 問4に続いての統計資料なので、解答に時間がかかっただろう。問題の配置も配慮してほしい。3種類のグラフを読まなければならない、難易度がやや高い。③の選択肢が解ければ、④の選択肢の正誤判断はすぐに出る。その意味では④の選択肢は適切か疑問が残る。
- 問6 調査対象と調査方法の正しい組合せの出題はこの単元では重要な設問である。しかしグラフがなくても、解答ができてしまうので、この点は改善を要するだろう。またグラフ問題が3題連続するので、問題配列を工夫してほしい。
- 問7 日本海沿岸諸国と日本の日本海側地域との関係は、近隣諸国学習の中で重視されるべき視点と考える。境港のみでの統計であるからやや判断が難しいとも言えるが、ロシアと日本との貿易関係を考えれば解答はできる。逆に、中国と韓国だけでは難問になっていた。
- 第3問 現代社会でも扱える分野であり、地理らしさをいかに出すか作問の難しい分野である。数字だけのデータだけでなく、7問中3問に模式図も含め、地図が利用されていることを高く評価する

とともに、こうした点は今後も継続していただきたい。

問1 日本の輸入額による輸入相手先の経年変化に関する問題である。出題されている国はいずれもよく学習されている国であり、基本的問題である。オーソドックスなスタイルの良問である。

問2 日ごろの学習活動の成果よりも、日常生活の知識を活用する問題になっている。地図を用いているが、図1の矢印はあまり意味をなしていないのではないかと。地理の問題としては疑問が残る。

問3 動きの全く異なる3か国を二つの側面から比較しており、日本の人口面での国際化に関する知識と基本的なグラフの読み取り技能を問う良問である。

問4 旅客輸送の種類と経路の変化に着目した点で面白い問題である。初めて見る模式図であるが、工夫されており、戸惑う生徒はほとんどいないと思われる。

問5 時事的な問題を含み、交通の発達という分野での問題としては基本を押さえていて良問である。統計資料の読み取り問題が多いので、このような文章選択問題は必要である。

問6 情報通信技術を産業や生活とのかかわりの中で出題したことは評価できるが、②の文章は常識的すぎるので工夫をしていただきたい。①と時差を組み合わせた問題や、④と国土面積・人口密度等の統計を組み合わせた問題もよいのではないかと意見があった。

問7 東欧地域の国々を取り上げたことは意欲的だが、選択肢の内容が冷戦時代の状況と現在のNATOとの関係に絞ってしまったので、問題としては難易度が高くなってしまった。「地理A」ではやや難易度の高い問題と言えよう。

第4問 近隣諸国の中国の自然環境、生活文化、産業に関する大問である。図1の挿入箇所が冒頭になっているが、検討を要する。図1に多くの記号が入り見にくいとの指摘もあった。中国の広い分野から出題されているが、設問の多くは基本的なものであり、全体としては妥当な問題であると考えられる。

問1 地図を用いて、中国の地形の概観を見る良問である。地理学習の基本を示している。

問2 年平均気温と年降水量の2軸グラフはあまり見慣れていない受験者が多かったと思われるが、中国の気候的特色を大観的に理解していれば解ける基本的な問題である。

問3 景観写真を用いた問題であり、その点は評価できる。しかし、写真の説明で解答のヒントが多くなるため、写真を用いる意義が薄くなってしまった。問い方に改善を求めたい。

問4 中国学習の基本的な問題である。分布だけではなく、宗教などを問う形にすることも考えられる。

問5 問題文にある「自然や農業の地域特性を…」という部分が十分に生かされていないのではないだろうか。代表的な料理がどういう背景で生まれてきたのか説明されていれば地理らしい問題になったと考えられる。地理を選択していない受験者でも解答できそうである。

問6 近年中国では、日本市場向けの野菜生産が盛んに行われていることから、生産が急増しているYを野菜と考える。中国の農業生産の基本動向を問う問題で、日本の野菜輸入とも関連する良問である。

問7 工業都市に関する出題は、生活文化を中心とする「地理A」ではあまり学習されない分野である。取り上げた4都市は「地理B」ならばよく学習されているが、「地理A」ではウーハン、ランチョウの難易度がやや高い。

問8 ①～③は基本的な内容である。ただし、④は日本がかつて中国から漢字を導入したことは周知のことであり、地理学習との関連が見えてこないのではなかろうか。

第5問 地球的課題は単純な知識を問う内容になりやすい分野であるが、地図2問、グラフ2問、知識・理解2問とバランスはとれている。また、特異な内容になりがちであるが、今年度は妥当な内容であったと考えられる。

問1 年齢の割に低体重という指標は初見の生徒が多かったと考えられるが、中位と高位の判断はやや難しいものの、じっくり考えれば日常の学習活動の成果で正答できる問題である。この問題のように、様々な要因を組み合わせて考える力と主題図を読み取る能力を見る問題は、高等学校学習指導要領の趣旨に合致しており、評価できる。

問2 二つの指標によるグラフを読み取り、四つの選択肢から誤答を選択させる問題で、問題の性質上難易度の高い問題になるが、丁寧に読み取れば正解にたどり着ける内容であり、評価できる問題である。

問3 輸出額と輸入額に占める食料品の割合からコートジボワールを判定する問題である。それぞれの国の特色をよく考えれば正答にたどり着けるが、「地理A」では難易度のやや高い問題である。シンプルな問題構成にもかかわらず、応用的でいろいろ考えさせられる点では良問と言えよう。

問4 三つの説明文の選択肢と位置を組み合わせる問題である。いずれも平易な内容であり、基本的な問題である。

問5 「地理A」で学ぶ基本的な内容が問われており、しっかり学習していれば迷うことはない。知識・理解の適切な問題である。

問6 時事問題に関する興味関心を問うていて、好感が持てる。ただし、日本での取組が強化されたという表現に迷った受験者も多いのではないかと。また地理的な知識がなくても解けてしまうのではなかろうか。

地 理 B

1 前 文

昨年度と同様、特定の分野に偏ることなく出題されており、また図やグラフを多用して、知識のみを問うのではなく、地理的な考察力や判断力を問う問題が多くなっており、その点は高等学校学習指導要領の趣旨にのっとり評価できる。また、難易度もおおむね標準的で妥当である。

今年度は地域調査の大問が第2問として設定されたが、これは地域調査を通して育成される地理的な見方や考え方を重視することの表れなのであろうが、グラフの読み取りと計算が同時に求められる小問が2問連続しており、解く時間がかかったと思われる。地理的知識と地図やグラフを活用して地理的思考力を試す問題が増えることは、常識や「現代社会」の成果で解けてしまう問題が減ることを意味し、それは同時に地理学習の成果を生かせる、地理を学んだ生徒がその実力を発揮できるという点において歓迎すべきである。しかし地理的技能としての資料読解では、数学的統計的読み取りを必要とするが、その点をどの程度まで問うのかについては再度検討していただきたい。また、昨年同様、地理的な思考・判断を意図したものの最終的には単純に知識を問う問題になってしまった小問があった。高等学校学習指導要領の趣旨にそって、思考・判断、資料活用の観点をなお一層重視して、引き続きバランスの良い出題を要望するものである。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 自然環境の学習は大観的な学習になっているため、作問者が平易な問題であると感じても、現場の実態とかけ離れた問題が出題されやすい単元である。この大問は大陸棚や局地風のようなやや細かい事項が含まれるものの、出題の方法や内容に工夫がされており、全体としては高等学校学習指導要領の趣旨を生かした適切な問題に仕上がっている。

問1 昨年は雨温図での選択問題であったが、今年はハイサーグラフでの出題となった。夏の降水量から判断できるが、他の3都市の判断は難しい。日常の学習でよく扱われている地中海性気候が問われているので、適切であると言える。

問2 大陸棚とプレートの境界の位置については、大観的な学習は行っているものの、細かい学習は行っていないが、広がる境界と大陸棚の分布がそれぞれ2パターンの組合せで問題を作成しており、またアイスランドが広がる境界として一般的に学習されることから、適切な問題になっている。

問3 地形断面図の設問であるが、ヨーロッパの地形学習と日ごろから地図帳をよく見ておくことが重要なことを意識させる問題である。

問4 説明文と地点の組合せ問題であるが、アとイに「地震」「氷河」がキーワードとなるので、標準的な問題になっており、適切である。

問5 局地風は細かい知識を問われるが、フェーン現象は基本であるので、解答は可能だったのではないかと考えられる。仮にボラが出題されていたら、正答率は大幅に低下していただろう。ただし、8択というのは感心しない。

問6 植生も大観的な学習ではあまり時間を割けないでいるが、問題文に見られる植生については教

科書レベルであり、針葉樹林のみの選択肢がないので、正答できる。世界自然遺産との関係についての記述も意味のあることである。

問7 氷河地形に関する基本的な知識を理解していれば正答できる教科書レベルの問題である。

問8 ケスタという地形名ではなく、イラストを用いてその形状などの理解を見る問題となっているので、やや難易度が上がるが、地形の問題としては適切である。

第2問 「地理A」本試験の第2問と共通するため講評は省略する。

第3問 農林水産業に関する基本的な問題である。知識・理解の問題が、6問中3問になっており、バランスを考えると、もう1問は分布図や統計などの資料を活用した地理らしい問題があった方がよかった。

問1 主な作物の栽培起原地に関する問題であるが、地図に示すことによって自然環境とのかかわりから考えることができる。サトウキビはともかく他の3作物の栽培起源については基本的なものであり、平易な問題である。

問2 小麦の生産に関する基本的な知識と気候などの諸条件との関係について、地理的思考力や判断力を見る問題である。栽培時期が地域によって異なることを意識させ、年間を通して小麦が入手できることを理解させる問題であり、良問である。

問3 各国の畜産業の特色に関する四者択一の問題である。インドの「白い革命」はあまり一般化されていないが、アルゼンチンが正答であり、教科書レベルの内容であると言える。

問4 木材の生産・消費・流通に関する基本的な知識及び開発に伴う伐採と商業的伐採との地域的差異の理解を図を用いて問うており良問である。自然環境、経済発展など多角的なもの見方と、三つの主題図を比較する読図力の必要な地理らしい出題形式も評価できる。

問5 漁業に関する知識・理解の問題である。食品の偽装問題で中国産のウナギに関してメディアで頻繁に取り上げられた時期もあり、時事問題も意識した出題と言える。取り上げた3か国の水産業の特徴は大きく異なるし、日常的な経験でも判断できるので平易な問題である。

問6 農業のグローバル化に関する知識・理解の問題である。米の自給的性格については基本的な知識として学ぶので、判断はできる。しかし①～③まではグローバル化を意識した内容であるが、「現代社会」や「政治・経済」と同じような内容になっており、やはりもう一工夫欲しい。

第4問 都市と村落に関する大問である。細かい知識を必要とする問題もあったが、6問中5問が図や表を利用しており、十分なヒントになったと考えられる。村落や都市の形態に関する問題は久しく出題がなかったが、系統地理的な細かい知識を重視する学習に回帰することなく、この大問のように図・表を用いるなど、高等学校学習指導要領の趣旨にのっとった作問を引き続きお願いしたい。

問1 村落の形態に関する問題である。この分野からの出題はあまりなされていなかったが、今回はそれぞれの村落の形状と機能を簡潔に出題しており、また模式図を使用しているので、分かりやすい。妥当であると言える。ヨーロッパの林地村が開拓村であることはやや細かい知識と言える。

問2 都市の形態では定番の問題である。それぞれの都市がどのような歴史の元に発展してきたかを問う問題と言える。チュニス受験者にとってややなじみの薄い地名と考えられるが、旧市街と注釈があるので、それがヒントとなり判断しやすい。またアメリカ合衆国の都市やキャンベラのような計画都市は授業でもよく扱われる。

- 問3 知識・理解の問題で、細かい知識を必要とする問題になっている。高等学校学習指導要領では、村落・都市は大観的な学習であることを考えると、ハーローとボローニャは授業で事例として扱われているか疑問である。例えばボローニャをパリとするなど改善すれば正答率は上がったのではないだろうか。写真を提示するなどの資料活用の工夫が欲しい。
- 問4 民族間の所得格差やセグレーションは先進国のインナーシティ問題を理解する上で重要である。ここではカリフォルニアにおけるヒスパニック人口の割合の高さについての認識が大きな判断材料となる。四つの説明文と4枚の分布図を対比して考えるので、少し時間がかかったと思われる。難易度はやや高いが、地理らしい問題で、高く評価できる良問である。
- 問5 都市の機能を問う問題である。日本の地方都市については各地域の動向に受験者の目が向くという教育的効果が期待できる。取り上げた指標並びその指標に基づいた都市の選択が特定の地域に偏ることなく選ばれており適切である。また昼夜間人口指数の式も明示されており、難易度はやや高いが、質の高い良問である。
- 問6 都市郊外の幹線道路沿いには大型のショッピングセンターが立地することを学習していれば難しい問題ではない。景観写真と説明文の組合せという地理的な出題形式問題であるが、この形式の欠点は景観写真を見なくても知識だけで解答できてしまう問題になりやすく、この小問もそのような形になっている。また写真スの店舗が地元資本のものかどうか受験者には判断しにくい。
- 第5問 カナダに関する地誌の問題である。現行の高等学校学習指導要領では国家規模の地域を二つ又は三つ学習し、地誌的にとらえる視点や方法を身に付けることになっている。この高等学校学習指導要領のもとでカナダを事例地域として授業を行っている学校は少ないと考えられるので、その国家特有の細かい知識を問うことは避けて、地理学習の成果を生かしつつ、地誌的な視点や方法を問う問題にすることが必要である。この大問では、自然環境、農業、都市、民族問題、貿易関係について出題されているが、「現代世界の系統地理的考察」やアメリカ合衆国の学習で得た成果を活用すれば解くことのできる問題が多く、やや細かい知識を問う問題も一部にあるが、全体としては適切な問題になっている。
- 問1 気候、地形、植生、海岸地形といろいろな分野で選択肢を設けている。いずれも基本的な内容で、適切な問題である。
- 問2 カナダの農牧業に関する知識・理解の問題であるが、隣国アメリカ合衆国や北米大陸及び世界の農業地域のいずれかを学習していれば判断はできる。
- 問3 「最大の人口」という部分がヒントになったと考えられるが、各都市についての知識がなくても地図上の位置から判断できれば問題はないが、この場合各都市の知識が前提となっており、地誌的な細かい知識を必要とする問題になっている。現行の高等学校学習指導要領では視点や方法を身に付けるのであるから、それらを補うために、資料を提示する必要があるだろう。
- 問4 変化の激しい二つの指標で判断ができる。EUの発展に伴うヨーロッパ系移民の減少とアジア系移民の増加はオーストラリアなど他地域でも見られる現象だが、アメリカ合衆国におけるヒスパニック増加と混同した受験者もいただろう。第4問の問4にはロサンゼルスにおける民族構成に関する設問もあり、もう少し工夫をしていただきたい。
- 問5 カナダにおける言語問題は世界の民族問題での頻出事項であり教科書レベルの基本的な問題と言える。こうした問題にも図を読み取る力を試す要素が入っており、基本を押さえる問題とし

て良問であると言える。

問6 3か国間の貿易関係の出題はよくある出題形式であり、思考力、判断力が問われる問題である。しかし、メキシコとカナダの判断材料がアメリカとの貿易額しかない点が問題である。品目を二つから増やす工夫が必要ではないか。やや難易度が高い。

第6問 現代世界の諸問題は統計資料が乏しく、また諸問題の変化が激しいため、作問が難しく、結果として知識・理解の問題が多くなりがちな分野である。しかしこの大問では南北問題、南難問題を図・グラフを活用するなど地理的アプローチで作問しており、高く評価できる。やや難しい問題と言えるが、学習してきた様々な知識を結び付けるものであり、地理を学習した受験者にはやりがいのある問題だったのではないかと考えられる。

問1 水資源利用可能量の定義を理解し、世界的視野から降水量と蒸発散量の関係や人口密度との関係を総合的に考察するという点で評価できる。しかし選択肢の説明文は知識を問う問題のようにも見受けられるが、選択肢の説明文の知識を問われてもそれを判断する資料がないので、最終的には階級区分を読み取るだけの問題になっている。この種の問題には常につきまとう問題点だが、何か工夫の余地はないものであろうか。

問2 保健衛生の水準は一般的にはその国の経済発展の水準に比例するので、経済の発展の程度を理解していれば解ける問題である。

問3 多収量品種と地下資源の輸出がキーワードで解答できるが、コンゴ民主共和国は受験者にとってなじみの薄い地域であると考えられるが、地図がヒントとなり判断できる。地図の利用が有効であることを示す問題である。説明文と分布図を組み合わせ、全体として適切な問題になっている。

問4 二つの要素の入ったグラフの読み取りには少し時間がかかる。先進国、途上国に分けて考えれば解答は明らかに③か④となる。シンガポールとタイの比較は両国の経済発展等の知識を要する。

問5 カは識字率と第3次産業割合の高さからメキシコ、クはすべての数値が小さくなっていることから、イスラム国で女性の社会進出が進んでいないパキスタンと考える。産業構造や宗教との関連から多角的に考えさせる良問である。

② 全国地理教育研究会

（代表者 揚 村 洋一郎 会員数 約600名）

T E L 0422-46-3311

地理A・地理B

1 前 文

全国地理教育研究会は、主に全国の高等学校で実際に地理を担当している教師を中心として構成された研究組織で、会員は年1回の研究大会と年2回の会報の発行を軸に研鑽^{けんさん}を重ねている。それだけに、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の問題には強い関心を持っている。毎年、センター試験の実施後には検討会を設け、様々な角度から意見交換を行っている。今回も、その場でも出された声をまとめ、本会の意見・評価としたい。

1 試験問題の程度・設問数・形式等

(1) 試験問題の程度について

今年度のセンター試験本試験は、「地理A」・「地理B」とともに、昨年度と比較して大きな難易の差はなく、標準レベルで、平均点では「地理A」で54.70点、「地理B」では64.45点となった。これは地歴の選択科目を地理に決めて受験に臨んだ生徒たちが納得できる程度であり、公民科目も含めて各科目ともに妥当な平均点にそろったと考える。特に「地理B」については、「望ましい難易度」が認識されてきたかなという印象である。一方、「地理A」は今年度も予想以上に平均点が低く出ているが、やはり知識が相当程度あることを前提に作問されていることが影響しているように思われる。難易には気を遣いながらも、知識の有無に特化せず、資料の読み取りの設問や資料活用、思考判断を伴う設問をもう少し増やすなどの努力が求められる。

地理の場合、例年、満点近い得点者は、世界史・日本史と比較して格段に少ないはずである。それは、従来から、初見の図表を丁寧に読み取る必要があったり、適切に学習していても間違えやすい問い方、複数の知識を重ね合わせて問う組合せの設問が多く見られるからであって、地理で受験する生徒の学力が劣るからではない。今年度の結果を踏まえ、次年度以降も、時間がかかりすぎることがないか、地理の学習範囲を逸脱した設問はないかななどを十分に精査するなど、内部努力の継続を強く期待する。

(2) 設問数や形式について

大問数は「地理A」5問、「地理B」6問で変更はなかったが、小問数はそれぞれ36問であった昨年度と比べて「地理B」で小問数が1問増え37問となった。また、「地理A」で地誌で8問、地球的課題で6問、「地理B」では自然環境で8問、地球的課題で5問と、大問ごとの小問数の微妙な調整が見られた。この設問数の変更は「組合せ」の多用や難解な図表の読み取りが連続するようなことがなければ何とか妥当な範囲内であると考えたい。「地理の基礎的事項」が「地理A」に残った点をはじめとして、大問のテーマが昨年度と比較して大きく変わらなかったのは一昨年度からの傾向である。

問題の形式については、①例年どおり「組合せ」の設問が多用されていること、②「地理A」・「地

理B」とともに地図や図・グラフが多用されていること、③地形図の利用は地域調査の大問のみで、2枚にとどまったこと、④写真が「地理B」でも用いられたこと、⑤第5問の地域調査の大問が第2問に移動したこと、などが指摘された。

①について、解答に時間を要する原因の一つである「組合せ」の形式は、今年度、「地理A」で10問、「地理B」で11問と昨年度と同数となった。ただし、「地理B」では変則の8択が入り、これを加えると12問となる。「組合せ」の形式は、作問上、4択にしにくいなど致し方ない場合はあると思われるが、安易に組合せの形式を多用することは、今後ともないようにお願いしたい。②については、「地理A」（地図5、地形図2、図7、表1、グラフ7、写真3）、「地理B」（地図5、地形図2、図13、表2、グラフ7、写真2）で、例年どおり図表の読み取りを問う設問が多く見られた。地理である以上、適切な地図や図表を用いて問うことは大切であり、基本的に歓迎する。③については、地形図は「地域調査」の大問のみにとどまった。④については、写真の鮮明度が増した点を評価する声があった。⑤については、高等学校学習指導要領上、「地理A」と「地理B」で地域調査の趣旨に相違が見られる点をどうとらえているのか、という意見が引き続いて出された。また、地域調査の大問が全体に力作な分、受験者に負担を強いたのではという声が多数出た。

3 「地理A」について

「地理A」とは何か、「地理A」らしい設問とは何かについて、引き続き重い課題が残った。現状、2単位の授業で扱える内容はかなり限定される。義務教育段階での社会科の学習内容も知識レベルでは極めて薄い。その中で、今回は、出題範囲としては適切でありながらも、やはり「地理B」との違いが明確でない「知識を前提とする」設問が目立っている。そのため、平均点が低いのは当然の帰結と言える。例えば、生活・文化色の強い「地理A」らしい設問をもう少し増やすなど、「地理A」らしさを追究する努力・工夫を重ねて求めたい。

第1問 「地理の基礎的事項」日本の明石市とその対蹠点^{たいせきてん}を中心とする2枚の正射図法の地図からの出題。全体的には「地理A」でも学習範囲の内容が問われているとは言え、問い方が目新しい小問もあり、基礎的事項というにはやや難しい。今年度は大問のタイトルと実際の小問に不整合を感じる。「地図の基礎的理解」の方が近い。8問とも地図から出題されている点は例年よりバラバラ感が薄く、この点は評価できる。

問1は日付変更線の知識を問う設問。設問文を読解し、題意に気付くことができれば平易。問2は新期造山帯に位置する山脈の選択。定番の設問であるがBとCは問われることがまれな山脈なので迷った受験者もいたか。問3は民族の生活を説明した文から位置を特定する設問。住居の説明等容易にモンゴル民族と分かるので易問。問4は日本の領土の範囲を問う設問。面白い選択肢の作りと評価できるが、ここまで正確に領域の範囲をとらえていないはずの受験者には難問だったろう。問5は3地点の宗教施設の写真。Kの位置が読み取りにくいことと写真が必ずしも見慣れたものではないので案外正答率は伸びなかったか。問6は対蹠点と2地点間の距離についての設問。これも設問文の読解と地図上の各地点の持つ位置の意味を読む必要がありやや難問だろう。問7は4地点の気候区分。地図が見慣れないことも手伝って、この設問も受験者にとっては基礎的事項とはなっていない。問8は3大陸の説明文の正誤。単純な知識問題も、基礎的事項なのかは疑問。

第2問 「山陰地方の地域調査」 近年定番の出題範囲となっているが、今年度はなぜ第2問に位置

付けられたのか。とても力を入れて作問された印象で、この点は大いに評価したいが、その分地図や図表が多く、読み取り等に時間がかかり、あせった受験者が多かっただろう。今年度も問7は「地理A」専用の設問であった。会話文は生きていない。

問1は地勢図による地形の読み取り。大根島が陸繋島りくけいとうか否かをこの地図から読み取ることは容易でない。消去法で解答できるとも言えるが迷う受験者が多かった設問だっただろう。問2は写真の撮影方向。これは平易。問3は地形図による土地利用の読み取り。「地理A」であっても対応可。問4は水産業に関する2枚のグラフの読み取り。「地理A」的な問い方で好感を持てるが慎重な読み取りが求められるレベル。時間がかかる設問の典型。問5はさらに3枚のグラフを読み取り正誤を問う文選。問4と似通った設問設定で工夫が欲しい。問4よりは易。問6は調査方法についての適否。これは易問。問7は境港での貿易相手国と輸出入品。貿易品を読みすぎると誤る。「ロシアからは材木が輸入され中古自動車が輸出されている」というステレオタイプの時事的な知識で正解を得るしかない。完成自動車かぎが中古車と分かるかが鍵となる。

第3問 「現代世界における地域の結び付きとその変化」 「地理A」らしさを意識した面白い図表も見られるが、やや作りすぎている印象。「地理A」の学習範囲から判断すると厳しいと思われる設問も見られる。

問1は日本の輸入先の経年変化。輸入相手国として中国が第1位となったことを意識した時事的設問で評価したい。問2は日本の輸入農産物の流線図。果実・野菜で選択させる点が新味。アメリカ合衆国＝グレープフルーツで単純に解けるが面白い設定と評価する。問3は在留外国人数と在留邦人数の経年変化。「近年日本で生活する中国人の増加と1990年以降の日系ブラジル人の増加、1980年以降の貿易摩擦でアメリカ合衆国に多い在留邦人」の知識の組合せ。良問と思う。問4は日欧を結ぶ交通手段の変遷。模式図は受験者には理解しにくかっただろう。これは作りすぎの評価。アンカレジ経由はもはや教えていない知識。

設問文の長さと分かりにくさも課題。問5、問6は交通・通信に関する文選。これは標準。問7は国家群。目の届きにくい東欧からの出題と知識レベルの高い選択肢文で難問である。

第4問 「中国の自然環境、生活文化及び産業」 近隣諸国で「地理A」の出題範囲も、細かい知識レベルで問うており感心しない設問が多く見られた。地誌の小問は8問で定着か。

問1は国土の標高。これは基本で「地理A」として対応可。問2は4都市の気温と降水量。これも基本。問3は3都市と景観写真の組合せ。受験者にとって都市の景観写真は常識の範囲でないので写真の下の説明文が鍵になるがキとクの説明が似通っておりやや難か。問4は3民族の居住地域。これは学習範囲で易問。問5は4都市の料理。肢文の内容が細かく判別が難しい。四川と言わずチヨントゥーと表現している点も難化している要因。問6は農畜産物の生産量の経年変化。急増しているYが野菜と判別する根拠の学習が行われていないので難。「富裕層が増えて肉類の消費が急増している」と授業で話しているので誤った生徒がいた。問7は四つの工業都市と各都市の説明。経済特区でシェンチェンと分かる作りにはなっているが、問い方は旧教育課程的で、他の都市を問うと「地理A」では成立しにくい。問8は日中の交流に関する文選。やや細かい知識も解答は可能だろう。

第5問 「食料にかかわる地球的課題」 地球的課題も出題の定番。小問が6問となっているのは、設問が作りにくいからだろう。工夫にも限界があることを感じさせる。

問1は低体重である子どもの割合の階級区分図の読み取り。経済力の指標とほぼ連動していると考えれば解答は可能。問2は世界の3地域の食料摂取状況を示す図の読み取り。

これは「地理A」として適した設問の事例。肢文も分かりやすい。良問とする。問3は4か国の輸出額と輸入額に占める食料品の割合。コートジボワールは「地理A」では教科書で扱っていない場合が多い。カカオ豆の生産で知られているとは言えやや酷か。問4は3地域の水利用。これもXとZの知識は教えていないと考えた方がよいので受験者には難問である。問5と問6は食料に関する文選。荒唐無稽こうとうむけいに誤ったつもりの肢文でも受験者には判断しにくい内容になっているか。それぞれの肢文はよく練れているが「現代社会」的設問である。

4 「地理B」について（「地理A」との共通問題を除く）

今年度の本試験「地理B」は、例年の試験問題を踏襲した穏当な問い方が多く、前年度とほぼ似通った難易度となっており適切な内容と難易度と評価する。ただし、「地理B」とは言え、もう少し現行の高等学校学習指導要領を考慮した、地理的見方、考え方を問う設問があってもよいと思われる。

第1問 「ヨーロッパとその周辺の自然環境」 扱う地域がヨーロッパということで受験者には安心感があっただろうが、やや細かい知識で既習事項と言えない設問も見られる。

問1は4都市のハイサーグラフ。タリンとワルシャワの違いは難。マドリッドなので解答は容易。問2は大陸棚とプレート境界の模式図。面白い図と評価できる。アイスランドにプレート境界が通ることは既習事項で①④の2択。大陸棚の範囲はやや難か。問3は4か所の地形断面図。AとCは比較的判別可能であるが、BとDのカルパティア山脈の部分は受験者には難しい。本問はAを聞いているので判別可。問4は3地域の自然災害。やや細かい知識が必要で、アとウの地域の判別は受験者には難しい。問5は局地風とその特徴。

文中の三つの空欄に入る適語の組合せを答える8択の設問。珍しい問い方。ボラを学習することはないので実質はフェーンの理解。基本である。問6はポーランドの原生林の特徴。植生に関する基本的な理解ができていれば解答は可能も正答率が下がる設問形式。問7はフィンランドに見られる湖の成因。これは平易。問8はパリ盆地のケスタ地形。③のような説明が授業でなされているか疑問。模式図も見慣れない感じで迷った受験者もいたか。

第2問 「山陰地方の地域調査」 「地理B」では標準の内容で図の読み取りなどに時間はかかるが正解は得やすかっただろう。小問ごとの評価は「地理A」のとおり。

第3問 「農林水産資源と産業」 設問内容はオーソドックスであり全体に平易であるが、よく考えて作られている良問が見られる。

問1は作物の主な栽培起源地。小麦はメソポタミアで基礎的事項。問2は小麦カレンダー。4か国の位置から推察は可能もやや難。良問の声あり。問3は4か国の畜産業の文選。

それぞれの肢文がよく練れており良問と思う。④の「白い革命」はだれも知らない用語だった。問4は木材に関する三つの指標で作成した図形表現図の選別。これも良問。日本とロシア・ブラジルを見れば正解が得られる。問5は3か国の水産業の特徴。ウの文は判別しにくい、アとイは分かるので解答は可能だろう。問6は近年の農業についての文選。④の誤りの肢文が安直な印象を受ける。

第4問 「村落・都市」 都市は出題テーマの定番になりつつある印象。ただし、やや工夫が不足し

ている。

問1は村落の形態の模式図からの正誤文選。基礎的事項も③は林地村が「自然発生的」でないという理由で誤っているのでやや細かい知識とも言える。問2は都市の街路形態。現高等学校学習指導要領の下では扱われにくい内容である。問3は4都市の都市整備や地域開発の特徴。ボローニャやハーローなど既習地名とは言い難い都市を聞いているので難問である。都市レベルの学習範囲に配慮して作問をお願いしたい。問4はロサンゼルスの人種・民族別居住地の分布図の選別。説明文と分布図を照合すると白人の居住地区は容易に判断できるが、あとはやや時間がかかる。決して易問ではない。問5は日本の3都市の特徴。問う都市を誤ると判断できない設問ともなり得るが、本問は全国区の都市で作問してあることから解答は可能。問6は4枚の商業地の景観写真とその都市の説明文から誤った説明を選ぶ設問。良問である。

第5問 「カナダの地誌」 必ずしも学習するとは限らないカナダが地誌の対象地域として選ばれた理由は何かという素朴な疑問が残る。深く学習していなくても解答が可能な設問ばかりが並んでいるわけでもないので得点率は下がっただろう。

問1はカナダの諸地域の自然環境の特徴。世界規模の地形・気候の大観ができていれば解答は可能。問2は特定の農業地域の説明の文選。これもアメリカ合衆国と農牧業地域の学習の延長で既習事項と考えられる。平易。問3は4都市の産業。この設問は都市の細かい知識が必要で難問である。

「トロントがカナダで最大の人口を有する」というのは教師側でも知識になっていない。問4は移民の推移。アメリカ合衆国の移民の推移もここまでは問わないだろう。難問である。問5は3州の母語別人口の割合。民族問題としての既習事項であり、これは良問である。問6はNAFTA3か国間の相互の貿易額。品目は参考にならないが、貿易額で判断できる。資料を考察する良問だろう。

第6問 「現代世界の諸課題」 諸課題の作問には苦慮した跡がうかがえる。発展途上国間の開発度の差を判断材料とする設問は難度が高くなる。全体に正答率は低かっただろう。

問1は1人当たりの水資源利用可能量についての階級区分図の読み取り。文中の下線についての正誤問題。不適切な部分はもう少し工夫したかった。問2は発展途上国に分類される3か国について結核発症数、医師数、乳児死亡率の差を問う設問。途上国でもアジア、アフリカ、ラテンアメリカで開発度が異なることを意識して授業をする必要を示唆しており評価できるが現実にはこのように教えられていない受験者が少なくないのでやや難問だろう。国レベルで比較している点も難度を上げる要因である。問3は食料需給の地域差。3か国の位置を地図上で指示している点と説明文の難度の高さで受験者にとって難問となっている。問4は4か国の少子化、高齢化の状況を示す図の読み取り。先進国と発展途上国に分けて考察すれば解答はできる。これは良問である。問5は3か国の女性の社会進出の状況の比較。これも発展途上国の3か国の比較とイスラム文化圏の理解が必要で難問である。

5 要 約

本試験の「地理A」・「地理B」を設問単位で検証した結果、本年度は昨年度に引き続き高等学校までの学習内容におおむねそった設問の割合が高く、学習範囲を逸脱した難問や奇問、判断に迷う表現は少なかった。この点をまず高く評価したい。また、例年と同じ内容を問う場合などに工夫したオリジナルの図や表を作成している点、設問の問い方を工夫するなどの努力が読み取れ、この点も評価したいと思

う。

本会では昨年の講評においても「受験者が高等学校までの授業で学習している範囲や常識的に身に付いていると考えられる知識レベルを作問される先生方に十分徹底してほしい」「知識を学ぶ学習が、これまでより大幅に減っている現状では、知識を前提とする設問にはより一層の深い配慮をお願いしたい」「先生方相互のチェック機能をこれまで以上に働かせてほしい」といった厳しい指摘と依頼をさせていただいた。このような提言に今年度も一定の前向きな答えをいただいたものとする。

ただし、今年度についても、「地理A」において知識理解に偏った設問が目立った点や、マイナーな地名、都市名、国名を用いて徒に難易度を上げるような設問が見られたことなど改善点も少なくないと思われるので考慮をいただきたいと思う。

本会は例年、(1)基礎・基本としての^{ひっす}必須な知識を整理し、それを前提に作問し、それ以上のレベルの知識には必ず情報を与えること、(2)授業で扱うことのない専門性の高い内容や未だ研究段階で諸説あるような内容を安易に出題しないこと、(3)専門性の高い作問者の常識と受験者のそれとの落差に留意すること、(4)解答にかかる時間に十分に配慮すること、を重点としてお願いしている。本会は学習の成果を踏まえた設問であれば難問でも評価する。今年度も作問者の御苦勞は十分感じ取れた。次年度以降も我々の手本となる問題の作成が行われることを期待して講評を終わる。